

越冬期散布によるイネウイルス病防除について

誌名	茨城県病害虫研究会報
ISSN	03862739
著者	針谷, 信義 浅野, 敏夫 松井, 武彦 渡辺, 正信
巻/号	10号
掲載ページ	p. 24-25
発行年月	1970年7月

越冬期散布によるイネウイルス病防除について

針谷信義※、浅野敏夫※、松井武彦※、渡辺正信※

発生予察資料(第1表)にみられるように、
 縞葉枯病が隔年多発生しかつ、年次が進むにつ
 れ発生面積が増加し、昭和42年の大発生とな
 った。

この大発生を契機に県西地域では、越冬期防
 除を実施してきた。その成果については昭和43
 年度については、本会報第8号で報告してきた
 ので、今回は昭和44年度の調査結果を報告する。

第1表 縞葉枯病の発生面積(ha)

年次	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	米 昭和43
発生面積	290	2505	1038	14210	10889	13876	5100	47314	62071	29867	年より調査
程度中以上	20	955	108	1474	723	2532	275	8274	4676	761	方法変更

第2表 越冬期防除の実施状況

年次	市町村数	実施面積	防除期間	薬剤名
43	3	2519	3.18 ~ 23	マラエース 35
44	9	13272	3.17 ~ 27	#

第3表 調査材料及方法

時期	区分	調査方法	調査場所	対象病害虫
越冬前(12月)		3.3 m ² 吹出法	休閒田, 畦畔	ツマグロヨコバイ ヒメトビウンカ
越冬後(2月)		#	#	
散布前(3・中)		#	#	
散布後(3・下)		#	#	
立毛稲(8月)		系統抽出法	立毛稲	縞葉枯病
再生稲(10月)		300~500株	再生稲	黄萎病

第4表 ウンカ・ヨコバイの生息密度調査

区別	種別 調査場所	ツマグロヨコバイ				ヒメトビウンカ				備考
		時期		3月防除		時期		3月防除		
		12月	2月	前	後	12月	2月	前	後	
防除町村 平均	休閒田	226.3	27.8	86.3	0.3	53.0	12.3	9.3	0.0	} 9 町村
	畦畔	162.5	6.9	38.2	1.0	83.2	20.5	38.8	1.5	
無防除町村 平均	休閒田	178.2	30.7	63.3	65.5	34.8	9.7	12.0	11.8	} 10 町村
	畦畔	82.6	5.7	32.3	36.3	29.8	18.8	53.0	45.9	

第5表 令構成の推移

項目	月日	3.5	10	15	20	25	31	4.5	10	15
平均令期		4.5	5.1	5.6	5.7	5.4	5.8	5.9	6.0	6.0
成虫率		11	3	46	39	10	22	90	42	61

調査虫数50頭以上

茨城病虫研報第10号(1970)24~25

※茨城農試

第6表 第1回成虫の飛込状況（水盤4枚合計値）

場所	3.31	4.3	5	7	10	12	15	17	21
麦畑	8	5	2	1	4	0	38	5	2
畦	0	0	4	4	4	2	18	10	8

第7表 第1回成虫の飛込状況（30回振りすくい取数）

町村	4.4	4.9	4.14	4.19	4.25
防除町村	0	0	0.7	1.3	1.5
無防除町村	0.3	0.9	5.5	2.6	3.8

第8表 縞葉枯病、黄萎病の発病状況

区分	縞葉枯病		黄萎病	
防除町村	立毛	1～2株	0～1株	
	再生	0.2～9.2%	0～1.8%	
無防除町村	立毛	1～10株	0～3株	
	再生	2.2～24.4%	0.4～3.9%	

考 察

越冬期防除の認識によつて、本年は9市町村が実施し、13272ha散布した。調査方法は第3表のように行い、防除効果を殺虫と発病の両面より判定した。

越冬期間中のツマグロヨコバイとヒメトビウシカの生息密度は第4表に示すとおり、平年に比しツマグロヨコバイが多く、ヒメトビウシカが並であつた。防除効果を高めるために、防除時期決定の前提条件として次のことを考慮した。すなわち「平均令期が5令台に發育して、成虫比率50%以下であつて、しかも♀成虫の麦畑移動前であること。」この様な点を含めて、本年は3月17～27日間に散布した。その結果初年目同様ツマグロヨコバイ、ヒメトビウシカとも、休閑田で殺虫効果が高く、畦畔において僅かに残存虫がみられたが、予期以上の防除効

果を収めた。

その後の調査として第1回成虫の飛込状況（第7表）でも防除町村と無防除町村間には、散布量と散布時期の差が顕著にみとめられた。このことから防除町村において、量の面から仮に増殖率が高まるとしても、時期の面から第2回成虫比率が低率時において、小麦の収穫が行われて、本田移動がかなり阻害されることが想定できる。以上のように殺虫効果が、その後の増殖移動にかなり大きく感与することが考えられたが、本年のイネウイルス病の発病は前年同様少なかつたが、第8表の如く多発田と再生稲の発病調査の結果防除町村と無防除町村間に差を示した。越冬期防除によるイネウイルス病防除は初年目同様少発生年次でも、常習発生地における効果は、高く評価することが出来た。